

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	齋藤 有 【人間発達科学専攻 平成23年度生】	要 旨
論文題目	幼児期の絵本の読み聞かせ場面における 大人の関わりに関する研究	<p>本論文は、従来より、絵本の読み聞かせと子どもの言語発達との関係について相関を示す知見は示されているが、読み聞かせ方が子どもの反応や理解にどう影響を及ぼすのか、といった具体的レベルではほとんど追究されてこなかったことを指摘し、絵本の読み聞かせ方により幼児の反応や理解がどう異なるのか、具体的な関連性を追究することを主目的としている。本論文における研究知見の概要は以下のとおりである。</p> <p>研究1では、母親の養育態度特性の相対的な違いによる、実際の絵本読み聞かせ場面での接し方や子どもへの反応、また子ども側からの反応を検討し、それらの違いを示唆した。研究2では、研究1の結果に基づいて、年齢による違いを養育態度特性間で比較するため、縦断的調査を行って検討した。その結果、子どもの年齢が1, 2歳と低い時期と、子どもの年齢が4歳以降では、母親の養育態度特性間の違いの表れ方が異なることを示唆した。研究3では、子ども側の自発的な「安定したパターン」的行動を引き出しやすい、母親の読み聞かせ時の接し方を、同じ絵本をほぼ1週間あけて繰り返し読み聞かせた場合の子どもと母親の言動の詳細を検討し、母親からの共感的で考える余地を与えるような反応が、子どもの絵本への自発的な関わりや発話を促す可能性を示唆した。研究4では、母子の朗読外発話が急減に減る、幼児期後期の子どもを対象に、絵本の朗読の仕方を操作し、物語への理解の度合いの差の有無を検討し、抑揚や緩急などの韻律情報を付加して読んだ場合のほうが、そうでない場合よりも、登場人物の心情に関する理解の度合いが高いことが主に示唆された。</p> <p>これらの研究結果に基づき、本研究の意義として、養育態度特性の相対的な違いによる絵本の読み聞かせ方や子どもの反応の違いを示し、子どもの自発性と母親の関わりとの因果的關係について実証的に示唆した点、さらに朗読の情緒的質が子どもの物語理解に与える影響を示唆した点をあげている。最後に今後の課題として、朗読の韻律的特徴と養育態度特性との関係、子どもの学びを促す関わりと発達過程の関係の詳細について検討していく必要性を述べている。</p>
審査委員	(主査) 准教授 上原 泉	
	教授 石口 彰	
	教授 内藤 俊史	
	教授 菅原 ますみ	
	教授 榊原 洋一	